

「雨やまないといいなあ」

作 伊藤ます美

登場人物

まや

白龍

こま犬

先生の声

友達の声

小学校最後の夏。

ある暑い朝 玄関からトボトボと歩き出すまや。いつも通る神社の前に差し掛かった時、生ぬるい風がさあーっと吹いたかと思うと遠くの空に稲妻が走り雷が鳴る。

——ピカッ！ゴロゴロゴロザーッ

突然の雨が勢いよく降り出す

まやは急いで神社の境内へ駆け上る

ビーチバックを床におろして空を見上げる

まや「雨やまないといいなあ…」

雨音はますます強くなる。

白龍「助けて…」

どこからか男の子の声がする。

まや「えっ」

白龍「助け…て」

まや「誰？」

白龍「僕 僕だよ…」

辺りを見回すと境内の入り口の水飲み場の中から声が聞こえる。まやは急いで階段を降りると水飲み場へ近寄る。突然の雨で水飲み場が増水し、中で小さな白い龍が翼をばたつかせている。

まや「えくくくつ龍って泳げなかったっけ？」

白龍「空は飛べるけど泳げないんだ…」

まや「ちよつと待って」

まやは溺れる龍を救い上げる

白龍「危ないところだったよ！ありがとう」

まや「あれ？水飲み場の上の龍の石像がない！…もしかしてあなたは…？」

白龍「そう、ぼくがその石像の龍だよ。」

白い龍は濡れた翼の水滴を飛ばしながらマヤの肩へ上る。

まやは白い龍をみつめながら深いため息をつく。

まや「あなたも泳げないなんて…」

雨音が強くなる。空を見上げるまや。

まや「雨やまないといいなあー」

白龍「どうして？」

まや「今日、水泳の記録会があるの…でも私泳げないから…」

境内の階段に腰をおろすまやと肩に乗る小さな白龍。横のこま犬が突然話し出す。

こま犬「泳ぎなら、わしが教えてあげよう」

まや「こま犬さん？泳げるの？」

こま犬「もちろんさ。こう見えても若いころは日本海を渡って中国まで泳いだものだよ。」

ため息をつきながら

まや「泳ぎ方知らないわけじゃないんだけど…」

白龍「何か事情があるようだね」

まや「ほんとは水泳が得意だったんだけど…」

こま犬「何か泳げなくなった事件でも？」

まや「うん。おととしの夏に…」

白龍「おととしの夏…？そういえば毎朝お参りに来てた時期があったよね」

まや「あの夏、大きな大会があつて。私メドレーリレーの選手だったんだ。私、背泳ぎだけは得意じゃないのに、アンカーの子が急に休んじゃって…。私が無理やり背泳ぎすることになって…」

こま犬「泣きながら急に帰ってきた日じゃな…」

まや「隣のコースにはみ出すし、途中で立ちやうし…プールサイドに上がったときの皆の顔って言ったら思い出しただけでなきたくなる…」

まやはうずくまって頭をかかえる。

白龍「また泳げるようになるよ」

まや「えっ?」

白龍「僕が助けてあげるよ」

まや「えっあなたが?でも、もう泳ぎたくないの…」

こま犬「大会で優勝するのが夢だったんじゃないの?」

まや「どうして知ってるの?」

こま犬「毎朝お参りしてたのはそのためだろう?」

白龍「まやのおはようの音がとても楽しみだったのに…あれからすつかり来なくなつて、寂しかったんだよ?」

いつの間にか雨脚は弱まり、西の空が少し明るくなってくる

白龍「ほら、僕の背中に乗って!」

小さな白龍は空へ飛び立つとみるみる大きな姿になってまやの横に再び降り立つ。

まや「どこに行くの?」

こま犬「もうすぐ虹がかかる。それまで戻ってくるのじゃ」

まや「だから、どこに行くの?」

まやを背中に乗せて白龍は空高く飛びあがる。

白龍「しっかりつかまるんだよ」

まや「プールに向かっているの?」

白龍「ああ、『あの日』のプールへね」

雲の間を抜けると急に明るくなり、下のほうにプールが見えてくる。  
まや「あの日？おとしの記録会のこと？」

白龍「そうだよ。下をみてごらん。おっと落ちないように。ほら、おとしのまやが泳いでいる。」

友達の声「がんばって、まや！」

先生の声「もう少しだ！がんばれ！」

その場にいる全員が、まやを応援していた。プールサイドは歓声に包まれている

そのとき、西の空が急に暗くなり、雨が降り出す。雨はだんだん強くなりプールサイドは一瞬でスクールにのまれる。プールサイドの人たちはあわてて屋内に入ろうとする。

ザザーツ

まやはプールサイドに上がるが、もうほとんど人は残っていない。  
まやも少し遅れてとぼとぼと屋内に向かって歩いていく。

まや「そうだったんだ…。私、てっきり責められているのだと思っ  
てた…」

白龍「うまく泳ぐことだけを考えてたんだね」

まや「自分で自分を責めてたのかも…」

「虹が出たよー」

遠くからこま犬の声が聞こえる

白龍「さあ帰るよ、まや…」

まやと白龍は豪雨の中を空へ駆け上った雲の中を抜けると雨はやみ、大きな虹がかかった。

白龍「雨、やんだね」

まや「うん」

神社に戻ると白龍はもとの小さな龍に戻る。

遠くから友達の声がする。

友達「あ、まや！傘持ってこなかったの？雨やんだよ！急がないと遅れるよ。」

まや「うん！今行くー！」

白龍「今日の記録会、きつとうまくいくよ」

まや「…大丈夫かなあ」

白龍「僕がついてるよ」

まや「そうね。でも、あなたは泳げないでしょ」

笑いながら肩に乗せる。

こま犬「わしと一緒に泳いであげよう」

まや「ありがとう。でも、犬掻きの種目はないかな」

白龍「もう、大丈夫だね？」

まや「うん。大丈夫。」

まやはビーチバッグを肩にかけると境内の階段を駆け下りる。